学校通信　共育ビジョン「自分のため、人のために考動する笑顔いっぱいさしきっ子」

創進

第２５号(最終号)
３月１８日発行
文責：吉海

校舎前の町道沿いの門から川側の門へと続くプロムナード。登校後、ここに姿を見せるのが朝の清掃ボランティアに参加している児童たちです。

この活動のきっかけをつくったのが、５年生の木倉蓮君。枯れ葉が落ち始めた頃でした。玄関前の掃き掃除をしていた木倉君に「寒い中ありがとう。どうして掃除をしているの」と声をかけたところ、白い息を吐きながら、「楽しいからです」との返事。意外な言葉に「なぜ掃除が楽しいの？」と聞いてみました。すると、「やってみればわかりますよ」と、はにかんだ笑顔で答えました。

おそらく、彼の姿をとおして、このやりとりが仲間に広がったのでしょう。もちろん、先生たちのはたらきかけもあったのでしょう。毎朝、登校指導を終えて学校に帰る途中、サッサッと箒で掃く音とあいさつの声が日に日に大きくなってきました。おかげで、プロムナードの枯れ葉が一つも見当たりません。被災校とは思えないほど美しいです。

あたたかい心だけでは世の中は生きていけないでしょう。でも、あたたかい心なくしては生きていくこともできないでしょう。損得抜きの心で考動できる児童が確実に育っています。今の佐敷小学校の自慢の一つです。

爽やかな朝のプロムナード

１２歳のわたしの「顔」

これでもかと災禍が続いた令和２年度。忘れられない時を過ごし、今月末に本校を卒業していく６年生に「自画像」を描く学習を企画しました。快く講師を引き受けてくださったのが漫画家の森真理様でした。児童は森先生の指導を受け、自分の顔をじっくり見つめながら、丁寧に絵筆を動かしていました。立福優翔君は「本当にいろいろなことがあった１年だった。これまでの中で一番よく描けたと思います」と感慨深く話しました。

プロのきめ細かなアドバイスにより完成した作品は、フレームに入れ、卒業式当日式場に展示することにしています。

次年度に向けての提言

本校では昨年度末に、保護者や地域の方々と連携・協働して児童の成長を支えていく仕組みとして、「さしきっ子育成協議会」(佐敷小コミュニティ・スクール)を立ち上げました。一昨日、委員の皆様にご来校いただき、今年度初の協議会を開催しました。(構成は以下の通り)

○佐敷地区３名	○計石地区１名
○田川地区１名	○大尼田地区１名
○学校評議員５名	○ＰＴＡ代表１名
○学校職員３名	合計　１５名

コロナ禍における学校と地域の連携の在り方が協議の中心になりました。人と人をつなぐための挨拶の励行や人権感覚をはたらかせた思いやりのある行動によって、地域を愛する児童や住民がもっと増えていくのではないかという貴重な提言をいただきました。

児童を見守り支えていただいた地域の皆様

花岡東地区

白岩地区

道川内地区

本校区は、芦北インターの供用開始以降、道路事情が大きく変わり、学校周辺の交通量が増えてきています。このような中、地域の方のご協力で、登下校時の安全指導を毎日行っていただいています。また、スクールバスのドライバーの皆様にも、安全運転に努め、児童の学校生活を支えていただいています。特に、今年度は水害の影響で田浦小・田浦中まで連日複数回往復してくださいました。皆様の温かいご支援・ご協力のおかげで、私たちは安心して教育活動に専念できました。職員一同、心より感謝申し上げます。

花岡西（中）地区

スクールバスドライバーの皆様

花岡西（上）地区

向町地区

教職人生の３感王（感心・感動・感謝）

現在の木造校舎が完成したばかりの頃、教頭として佐敷小学校に在職していました。「不知火海に浮かぶうたせ船をモチーフにした木の香りのする校舎です・・・・・・」というフレーズで、町内外から視察に来られたお客様を連日案内していました。それから１３年後、今度は熊本豪雨災害による被害状況を校長として説明しなければなりませんでした。運命、宿命というよりも私に課せられた最後の使命だったと受け止めています。逆境に負けなかった子どもたち、二次被害防止のために身を粉にして頑張った先生たち、物心両面で支えてくださった方々など、多くの人の力が加わったことで、校長職の重責を担いながら働くことができました。私の役割は、「さしき２６５号」をドローンの目線で俯瞰的に見守り、教育実践を軌道修正することでした。走行中、感心したのが自分のため、人のために考えて行動しようとしているたくさんの子どもたちの姿でした。同時に、その行為の結果がもたらす笑顔いっぱいの表情に感動を覚えました。大変な時でしたが、子どもたちは大きく変わりました。私にとってこの職に就けた真の喜びを味わうことができた忘れられない２年間でした。おかげ様で、「さしき２６５号」は無事に終着駅に到着できそうです。

行き届かないところがあったにもかかわらず、不器用な私を認め、ほめ、叱咤激励して鍛えてくださったすべての皆様に心より感謝申し上げ、学校通信『創進』の最終号といたします。

ご一読いただきありがとうございました。　　**校長　吉海 達也**